



だより



R7.12.2 Vol.30

市内音楽発表会

去る11月21日、市小中音楽会がコミカンで開催されました。本校も5.6年生が参加し、「truth」を堂々と演奏しました。叩く鍵盤を間違うとごまかしがききにくい楽器だと思うのですが、それをメインにあれだけの演奏をした真穴っ子たち！普段からの努力の成果だと思います。どの学校も素晴らしい演奏だったのですが、真穴小の演奏後の拍手の時間がちょっとびっくり長く感じたのは私だけでしょうか？

壮行会でも少し触れましたが、演奏のクオリティはもとより、観客の方々はその後ろに見える子供たちの頑張りや努力、成長、そんなものを感じるから心が動くのだと私は思っています。

普段から関わっている教師、生まれた時から人生を共にしている親御さんなら、ことさらでしょう。

「一生懸命」「努力」これからも大切にしていきます。サイコーでした！

言葉って難しい

Vol27のコラム「ゲーム」で紹介したのは、俵万智さんの「生きる言葉」という本の一節でした。読み進めていると、これまで校長室だよりで書いてきたような内容もいくつかありました。「あ！やっぱり！ですよね～！」と現代を代表する歌人からお墨付きをいただいたような気持ちになり、すっかりご満悦の私はやはり小市民！と苦笑い…。

中にあった「若者言葉」について少々。曖昧に表現することでお互いが傷つかないようにしているのかなあと年寄りの私は感じています。ここ数年よく聞く「大丈夫です。」場合によってはやんわり否定の表現だと思うのですが合っているでしょうか？

ある時、「やる気がないんならやめろ！」と叱咤の言葉に対して「あ、大丈夫です。」との返答。私は違和感しか持ちませんでした。そこは「頑張ります！」とか「やります！」ではないんでしょうか？

四方山話真穴 ver2. 其の三十(節目)

来年度入学する子供の保護者の方に挨拶する機会があり、(昨年度も同じような話をしたのですが、)「節目を子供にも感じさせてください」という話をしました。これまで入学前の子供たちは、お宮参りやお食い初め、初節句、七五三等、様々な節目を経験していることでしょう。が、これはどちらかと言えば、我が子が無事に育ってくれていることを喜び、感謝する、親が感じる節目のような気がします。そう考えると、小学校入学は子供たち自身が初めて自分の人生の節目として捉えられるものではないでしょうか。

私は子供の頃、その小学校入学前に父母に呼ばれ、「これからは父ちゃん、母ちゃんでは返事せんよ！お父さん、お母さんと言うようにしなさい！」そう告げられました。突然、父母が遠くに行ってしまうような不安や寂しさを感じたことを今でもはっきり覚えています。しかし、振り返ってみると、「今までとは違う！」と感じた瞬間であり、それを自覚した日でもあり、そして自立への最初の小さな一步だったのかなと思うのです。

親子の関係は当たり前ですが、死ぬまで変わりません。成人しても我が子が可愛い気持ちは変わりません。ただ自分から見たら可愛い子供であっても、世間から見たら、立派な大人なのです。いい歳した大人が例えば、「うちのパパがね…。」私は違和感しか持ちませんが、どう感じますか？変わらない関係だからこそ、何かを変える節目は必要だと思うのです。パパママ否定ではありません。今はそれが主流になっています。親の役目は子供を自立に向けて導いてやることです。可愛いからこそ自立に向け、節目を感じさせてやる。「可愛い子には旅させよ」そういうことだと私は思っています。(もちろん、価値観はそれぞれです…。)

切り取り線

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思います。